



Title	ベラスケス (2)
Author(s)	森本, 久夫
Citation	Estudios Hispánicos. 1986, 11, p. 31-42
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/97907">https://hdl.handle.net/11094/97907</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ベラスケス(2)

森 本 久 夫

### 1

17世紀のイスパニアは、経済的裏付けもなしにカトリックの信仰を守り、広大なアメリカ大陸に植民政策をおしそすめたために、国土は荒廃する結果を招いた。また戦争が絶えず続きアメリカへの移民が行われて、ヨーロッパの国々が人口増加していったのに、イスパニアでは減少した。

また当時のヨーロッパは商工業が盛んになってきていたが、イスパニアではそうではなく、アメリカ大陸から流入する莫大な額の金銀はアメリカに向けて輸出する商品を購入するために消費され、イスパニアにおける生活費の上昇をもたらしただけで、イスパニア経済そのものをうるおさなかった。たとえば海運業は16世紀より低調になっていた。工業は労働力の不足と他の国との競争に敗れたため衰退しがちであった。農業も労働力の不足と重税のため衰微し、目立った技術的向上が見られなかった。商才にたけたユダヤ人や農工業人口の中心をなしていたモリスコを追放したことでもイスパニア経済衰退を激化させる一因になったと思われる。

要するに17世紀のイスパニアを経済的に見たとき、16世紀にすでに破たんをきたしていた経済状態が表面化したと言えるのではないだろうか。

17世紀のイスパニアを政治的にみると、16世紀にカルロス1世（カール5世）、フェリペ2世のような強力な個性をもつ王をもつたのとは対照的に、どの王も個人としては善良な人物であったり、文芸を愛する知識人であつたとしても政治力を発揮することがなく、寵臣にまかせたままの場合が多くた。その場合、有能な人物が寵臣であるなら国のことを見越すが、多くは私腹をこやし、国のことを見越すため、イスパニアをヨーロッパ列強の地位から落とすことになった。

この時代を順を追ってもう少し詳しく眺めてみたい。

フェリペ2世のあとを継いだフェリペ3世（1598—1621）は1578年にマ

ドリッドで誕生、1598年即位した。(その翌年の1599年セビーリャでベラスケスが生まれている)この王は善良で信仰厚い人物であったと言われるが政治力がなく、寵臣のレルマ公およびその子ウセダ公に政治をまかせきりであった。1601年から1604年にかけて王はマドリッドからバリヤドリッドに居を移して住んだが、レルマ公はマドリッド市民からの賄賂を受けるとあっさり首都をマドリッドに戻し、莫大な費用を消費した。また当時、イスラムからキリスト教への改宗が行われてすでに長い年月が経過していたにもかかわらず、多くのモリスコたち(国土回復戦争の開始とともに、キリスト教君主の支配下に住んだイスラム教徒をムデハルと呼び、彼らはイスラムの信仰を保持することを許され、数も多かった。1492年グラナダ王国を陥落させて国土回復戦争を完結させたカトリック両王はアルフォンソ10世以来の彼らに対する伝統的な寛大な政策を示したが、1501年のムデハルたちの反乱を契機に、1502年彼らにキリスト教への改宗か国外退去の二者択一を迫った。そしてキリスト教に改宗した人たちをモリスコと呼ぶようになった)が表面はキリスト教徒を装いながら、秘かにイスラムの信仰を信奉しつづけていた。彼らは北アフリカの海賊と呼応して内戦を引き起こす危険があると思われた。一方でネーデルラントの戦争がつづいていた當時のことレルマ公は国内平和を何よりも求め、1609年モリスコの追放を断行した。そのため、1611年にかけて、レバンテ地方(バレンシアを中心とする地中海沿岸)から低アラゴンにかけて農業に主として従事していたモリスコの多くがアフリカへ去った。その数は5万とも50万とも言われている。その政策は農業の衰退を招く経済的にみれば乱暴すぎる政策であったろうが、国全体をカトリック一色にするというイスパニア的な宗教統一政策としては成功であったといえよう。

また先程も触れたようにネーデルラントではフェリペ2世時代からの戦争がつづいていた。オレンジ公ウイリアムの息子マウリシオ・デ・ナッソーが軍を率いてイスパニアに抗戦していた。イスパニアはジェノヴァ出身のアンブロシオ・デ・エスピノラの率いる軍隊をもってそれに対戦し、1604年には現在のベルギーにあるオステンデで大勝したが、経済的に戦争を継続する余力がなく、モリスコ追放を断行した1609年反乱軍と12カ年の和平条約を結んだ。これが史上実質的にオランダの独立を認めたといわれる事件である。

1621年フェリペ4世(1621—1665)は父フェリペ3世の後を継いでイスパニアの王位に即いた。教養もあり、賢明な王であったが政治を好まず、寵臣オリバレス伯公ガスパル・デ・グスマンに一任した。この伯公は前王時代のレルマ公、ウセダ公らの汚濁した政治を正し、ヨーロッパでの支配権の回復を目指んだが、そのための財源が見当たらず目的を達成することができなかった。20年間にわたってイスパニア政治を牛耳り、その間ネーデルラントでの戦争は1621年に再開し、エスピノラ将軍の率いるイスパニア軍は連勝した。1625年6月5日のブレダ(現オランダ)の陥落はその時期の勝利のひとつである。しかし、この戦争そのものはその後もつづき、30年戦争というヨーロッパ戦争に巻き込まれることになり、のちにウエストファリアの和平条約でイスパニアは正式にオランダの独立を認めることになった。オリバレス伯公はこうしたヨーロッパ戦争を遂行していくために、経済的・行政的中央集権化をはかった。そのためアラゴンや当時イスパニア領であったポルトガルにもカスティーリャ同様に戦費を出すように要求した。これら両王国がカスティーリャと同じ利益を得るのならそれもいいであろうが、現実はそうではなかった。たとえばアラゴンの出身者はアメリカ貿易から除外されていた。そのため両王国の人々は16世紀以来の特権を守るためにカスティーリャに対して抵抗した。1640年ポルトガル入たちはリスボンで武装蜂起し、ブラガンサ公をポルトガル王ジョアン4世として擁立、オランダ、フランス、イギリスに援助されてイスパニア軍を破った。フェリペ4世の死後3年にして、イスパニアはセウタと交換にポルトガルの分離を認め、以後両国を合併することはなくなった。1668年のことである。ポルトガルで反乱が起こった1640年カタルーニャの農民が反乱を起こし、13年間にわたって内戦はつづいた。一時フランスの援助を得て反乱者たちは共和制をとったりしたが、1652年フェリペ4世の庶腹の息子ホアン・ホセ・デ・アウェストゥリアによって鎮圧され、翌年彼らの特権は尊重されるという保証を得て降伏した。その他アンダルシア、アラゴン、ナポリ、シシリアなどで分離を求める反乱が起きたが、いずれも直ちに鎮圧した。このようにオリバレス伯公時代は多事多難であったが、彼自身国威の回復を求めながら果たせず1643年失脚した。王フェリペ4世は后イサベル・デ・ボルボンの忠言によって伯公を更迭し、一時、親政を行い、政治に意欲をみせたが、翌年后が死去すると再び意欲を失いルイス・メンデス

・デ・アロに政治をまかせてしまった。1659年フランスとピレネー和平条約を結んだイスパニアはロセリヨン、アルトワなどを失い、フェリペ4世の王女マリア・テレサをルイ14世に嫁がせることになった。婚儀は1660年にフェザン島で行われたが、その準備の責任者がかつてオリバレス伯公の後楯で宮廷画家の道を歩むことになったベラスケスであったし、この任務はベラスケスの生涯で最後の大任であった。

1649年フェリペ4世と結婚したマリアナ・デ・アウストゥリアは1661年王子カルロス2世を生んだ。フェリペ4世が1665年死亡したときカルロス2世は4歳にすぎず、しかも病弱であった。そのため后マリアナ・デ・アウストゥリアがカルロス2世の未成年期の後見役を務めることになったが、マリアナは政治をチロル出身のイエズス会士ニタル神父に託した。そのため以後10年間彼女側とカルロス2世の庶出の兄ホアン・ホセ・デ・アウストゥリア側との内紛がつづいた。国民はホアン・ホセを支持し、ニタルの更迭に成功したが、マリアナはフェルナンド・デ・バレンスエラに政権を託し、ホアン・ホセ側には任せなかった。当時フランスではルイ14世が君臨し、帝国主義政策を打ち出し、フランドルにあるイスパニア領をねらっていた。そのため、カルロス2世時代は絶えず対仦戦争をつづけざるを得なかった。

1675年カルロス2世は成人したが、知能が遅れていて政治力がなく、またバレンスエラが失脚したので、はじめてホアン・ホセが政権を担当することになった。しかし実権を握ってからのホアン・ホセは国民が期待したほど実績を挙げず、その上に1679年死去した。そこでマリアナ自身が統治にあたったが、イスパニアは衰退の一途を辿るばかりであった。カルロス2世の晩年、フランスの進出を恐れた諸国はフランスと対戦、イスパニアも参戦した。ルイ14世はすでにルクセンブルグを奪っていたが、その後、フランドル、アメリカ、アフリカ、カタルーニャでイスパニアを攻撃し、ついにバルセローナを占領するに至った。しかし、1697年のリュイスウイック和平条約でイスパニアに占領地をすべて返還した。カルロス2世は1700年に王位継承者を残さずに死去したが、彼自身フランス王ルイ14世の2番目の孫にあたるアンジューのフィリップを後継者に指定していた。そのためイスパニアの18世紀は王位継承戦争をもって始まる事になったし、また16世紀以来のアウストゥリア王家はカルロス2世をもって閉じることに

なったのである。

ベラスケスはフェリペ3世時代にこの世に生をうけたが、次の王フェリペ4世時代に首席宮廷画家となり、生涯その王の保護をうけつづけ、その時代のイスパニアの歴史と直接関わって生きた。彼の作品の数の少なさも、そのテーマの特徴も一つにはこの点と関わっているのであろう。

## 2

ついで、この時代を文化の面からみてみたい。前世紀のフェリペ2世は文化のよきパトロンであったため、その頃からイスパニアの文化は隆盛を來たした。皮肉なことに経済的にその頃すでに破たんしていたと思われるが、次の17世紀にかけて文化はますますすぐれたものを生み出したのである。そのため、16世紀後半から17世紀全期にかけてを黄金世紀とよんでいる。ベラスケスの生きた17世紀はその黄金世紀の文化の最盛期とみなすことができよう。

とくに文学と美術についてみると、どちらもイタリア・ルネサンスの影響から出発しているといえる。

詩人ではフェルナンド・デ・エレラやルイス・デ・レオンなど16世紀の抒情詩人について2世紀にまたがってルイス・デ・ゴンゴラが出現し、平俗なレトリーリヤやロマンセを書く一方で、クルテラニスモと呼ばれる技巧のかった作品を残した。

散文では「トルメスのラサリーリョ」が出現して、一般民衆のしたかさをリアルに描写するピカレスク（悪者）小説というジャンルが生まれた。1626年に出了ケベドの作品「かたり師ドン・パブロスの生涯の物語」はこのジャンルの最高の作品とみなされている。

しかし散文作品でこの黄金世紀の最高の作品がセルバンテスの「ドン・キホーテ」であるということに異論をとなえる人はいないのではなかろうか。この作品は前の時代から多く読まれてきた騎士道小説に対する皮肉・パロディともとれるし、もっと深く大きくイスパニアの辿った歴史を象徴していると考える人もいる。しかし、ドン・キホーテとサンチョ・パンサという典型的な2つの人間のタイプを創造した意味で世界的価値をもつ文学作品といえると思う。

演劇では16, 7世紀にまたがって活躍したロペ・デ・ベーガについて、17世紀ではペドロ・カルデロン・デ・ラ・バルカが出て、「人生は夢」や「サラメアの村長」のような名作を残した。また、ドン・ホアンの原型を創造したティルソ・デ・モリーナやフランスのコルネイユに模倣される作品「疑わしき眞実」などを残したメキシコ生まれのルイス・デ・アラルコンたちの名も忘れることができない。

これら文学と同様にイタリア美術の模倣から出発した美術であったが、イスパニアでは最初から宗教的であるという特色をもっている。16世紀の人ホアン・デ・ホアネス（1532—1579）は聖母像を残し、「イスパニアのラファエッロ」と呼ばれた。エストレマドゥーラ出身のルイス・デ・モラレス（1509—1586）は「ピエタ」など多くの宗教画を残し、エル・ディビーノとよばれた。ついでフランシスコ・デ・リバルタ（1555?—1628）がバレンシアから出て「サン・ブルーノ」「最後の晩さん」などリアリスティックな作品を残した。彼の息子ホアン・デ・リバルタもすぐれた画家であった。ホアン・デ・ラス・ロエラス（1558—1625）は画家であり司祭であったが、スルバランの師として名を残した。ホセ・デ・リベラ（1588—1652）はバレンシアのハティバで生まれ、フランシスコ・デ・リバルタの弟子であったが、後にミケランジェロ、コレッジオの弟子となつた。ナポリの王宮にあってそのすぐれた才能を発揮した。小柄な人だったところからエル・エスピニョレットと呼ばれたようである。リアリスティックでダイナミックな作品がその特色であるが、マドリッドのプラド美術館にある「聖バルトロメの殉教」はその代表作のひとつである。1630年、その前年からイタリアに滞在していたベラスケスはナポリでリベラを訪ねている。

やがてエル・グレコ（1550—1614）がイスパニアに到着した頃からイスパニア絵画はその絶頂期を迎える。エル・グレコは本名ドメニコ・テオトコプルスというクレタ人であった。彼はベネチアで勉学したのち、1576年イスパニアに来てトレドに住みつき、生涯そこで暮らした。はじめフェリペ2世の宮廷画家を目指したが、ついに果たせなかつた。画家としてはミケランジェロの流れをくむマニエリズムの画家であつて、マニエリズムの特色を発揮したが、同時にリアリズムの面も発揮した。当時のイスパニアの文化の中心のひとつであったトレドに住み、つねにその地の文化人を集めサーカルを作つていた。そのため彼が死んだときは作品以外ほとんど

財産は残っていなかったが、のちにその作品が莫大な遺産として価値をもつことになったといわれる。彼の作品がもつ深い宗教性のゆえに、彼はギリシャ人であり、エル・グレコとよばれながら、イスパニア人からは代表的なイスパニアの画家とみなされている。大原美術館所蔵の「受胎告知」は堀辰雄の作品<sup>(1)</sup>を通して知る人がかなりいる。プラド美術館の「胸に手をやる騎士」、トレドのサント・トメ教会にある「オルガス伯の埋葬」などが彼の代表作で一番よく知られているものであろう。

17世紀に入ると、セビーリャを中心にして多くのすぐれた画家たちが輩出した。フランシスコ・エレラ・エル・ビエホ(1576—1656)はイスパニア自然主義の先駆者となった。彼の息子フランシスコ・エレラ・エル・モソ(1662—1685)はローマで働いたのち、フェリペ4世の宮廷画家になった。

フランシスコ・デ・スルバラン(1598—1664)はエストレマドゥーラの人であったがセビーリャで暮らした。多くのリアリスティックで地味な構成の宗教画を残した。修道士を描いた作品が多く、修道士の画家として知られている。マドリッドで死んだ。

バルトロメ・エステバン・ムリリョ(1618—1682)はセビーリャで生まれ、セビーリャで死んだが、友人だったベラスケスの模写をすることによって絵を学んだといわれる。宗教画、とくにプリシマとよばれる聖母像で特異な才能を発揮した。

エレラ、スルバラン、ムリリョだけを代表としてとり上げたが、その他多くの画家がセビーリャを中心に活動したため、彼らのことをセビーリャ派またはアンダルシア派とよんでいる。

絵画の豊富さに比べると彫刻の少ないイスパニアであるが、16世紀後半から17世紀半ばにかけて多色塗木彫が盛んだった。その中心はバリヤドリッドとアンダルシアであった。バリヤドリッドではグレゴリオ・フェルナンデス(1566—1636)がもっとも活躍した。彼自身はガリシアの出身であった。「ピエタ」がその代表作のひとつである。セビーリャではホワン・マルティネス・モンタニエス(1564—1659)が活躍し、ベラスケスやムリリョに高く評価された。作品に「受難のキリスト」がある。グラナダではアロンソ・カノ(1601—1667)が活躍、「サン・ブルーノ」や「無原罪の聖母」などを残した。アロンソ・カノは画家としても著名である。これら多色塗

木彫は教会に飾られる聖像であって、聖週間の行列では街頭に登場した。モンタニエスとカノは多くの弟子を残した。これらの木彫の隆盛は絵画の隆盛と同じで極めてカトリック信仰の色彩の濃かった当時の空気の反映ではなかろうか。

金属細工ではエンリケ、アントニオ、ホワンの3代にわたるアルフェの一族の活躍が目覚ましく、その作品が現在もあちこちの教会に残されている。

建築についてみると、16世紀のフェリペ2世時代はホワン・デ・エレラに代表される重厚さを特色とするエレラ様式が中心で、エル・エスコリアルがその原型となったといわれる。マドリッドのプラサ・マヨールやパリヤドリッドのカテドラルはこの様式で作られている。この様式はフェリペ3世時代まで盛んであった。しかし17世紀半ばにイタリア・バロックの様式が入ってきた。溢れるばかりの装飾を特色とするこの様式はイスパニア人の好みに合ったといわれる。ホセ・デ・チュリゲラ(1650—1723)はその代表的な建築家で、よくチュリゲラ様式ともよばれている。その代表作にサラマンカのプラサ・マヨール、サラゴサのピラール教会、サンティアゴのカテドラルのファサードなどがある。

## 3

以上、ベラスケスの生きた17世紀のイスパニアを概観したが、拙稿「ベラスケス(1)<sup>(2)</sup>」で述べた画家自身の生涯と重ね合わせてみると、政治的に衰微した時代ではあったが文化的には非常に成熟した時代に彼は生きることになる。しかも、史上まれにしか見られないすぐれた画家が多く輩出したセビーリャで生をうけたのである。フランシスコ・パチェコの許にいたことがオリバレス伯公の援助をうけることになったし、その生涯の大半を王フェリペ4世という美術愛好者の庇護の下で生活したため、経済的苦労をせずに生きられたであろうし、ルーベンスという当時の世界一といわれた画家と接することにもなったのである。イスパニアの社会の最高の位置にありつけたことになるし、彼の生涯を語ることは当時のイスパニアの歴史を語ることになる。ほとんど彼の私的な生活を語る必要のない生涯であったように思われる。一例を挙げるならば、彼の妻ホアナ・パチェコ

について語られることが非常に少ない。画家自身も多くを語らない。わずかに「巫女」*Sibila*という作品がホワナがモデルではないかと言われる位である。ホワナのことがほとんど語られない。これは何を意味するのか。私はベラスケスが私的に生きること少なく、生涯の多くを公的に生きたためではなかったかと考えている。夫婦としても幸せな一生だったのではないかと思う。2人の間に波乱があればきっと何かが語られるはずである。市井の職人として生きるのではなく、宮廷画家として生きたベラスケスである。そこでは妻のことを語る必要がなかった。語る場がなかったともいえる。もし語るとすれば私的な場においてである。しかし、そこで語らなかつたことは、語るべき波乱がなかつたためと解していいのではないか。

17世紀、つまり黄金世紀のイスパニアの文学と美術を対照した場合、ロペ・デ・ベガなどの作品を除き、文学では世俗的なテーマが多い。一方、美術はきわめて宗教的テーマが多い。そのちがいはどこからくるのだろう。そのひとつは、それらの受け手のちがいから来るのではなかろうか。文学とちがって美術の場合、画家はギルドを形成しており、工房をかまえた画家は親方（師匠）として弟子や助手を抱え、注文に応じて作品を制作した。非常にカトリックの空気が濃かった当時のイスパニアでは注文主はほとんど教会関係であった。それは結果的に大部分の画家たちに宗教画を制作させることになったのである。画家自身が宗教的意欲があるなし以前の生活問題であったのではないだろうか。ベラスケスには宗教画が少ない。オルテガ・イ・ガセットはベラスケスはマドリッドに出てから後には「磔刑のキリスト」*Cristo crucificado*, 「聖母の戴冠」*Coronación de la Virgen*, 「柱にしばられたキリスト」*Cristo atado a la columna*, 「聖トマスの誘惑」*La tentación de Santo Tomás*の4作しか制作しなかつたと述べている<sup>(3)</sup>。まだセビーリャで暮らしていた頃、いくつかの宗教画を描いているところからみると、宗教画を描こうとしなかつたというより、描く必要がなかつたとみるべきであろう。職人としての画家なら宗教画を描かねば生活していくなかつた時代である。ベラスケスは当時の画家としては全く例外的な生活をし得た画家といえる。神吉敬三氏は「ゴヤまでの、つまり19世紀初頭までのスペイン絵画は、その85パーセントが宗教画で、残りの大部分が肖像画、神話画は殆んどなく、裸婦にいたっては僅かに数点一厳密にいえば、ベラスケスの《鏡を見るヴィーナス》とゴヤの《裸のマハ》の2枚の

みで...」<sup>(4)</sup>と述べておられる。ベラスケスは宮廷画家という特殊な地位にいたため、神話画をいくつか残し得たし、上記の「鏡を見るヴィーナス」*La Venus del espejo*も描き得たのである。

イタリア・ルネサンス美術を見ると解るが、神話画は人間の肉体美を表現する手段であったし、それを楽しんだのは王侯貴族であった。イタリアではそれから肉体美を享受し得るよきパトロンが多かったことが、そうした特色を生んだといえる。イスパニアに目を向けたとき、その層が非常に限られ、ほとんど王だけであったようである。フェリペ4世はルーベンスの作品を多く入手したが、そこにはイタリア美術同様の肉体美の表現が多くみられる<sup>(5)</sup>。上記の「鏡を見るヴィーナス」はルーベンスの影響をうけて描かれたといわれる。ヴィーナス像として神話画の体裁をとっているが、明らかに女性の肉体美を描こうとしたものと思える。鏡の中に映る女性の顔は彼女の背ほど表情をきめ細かく描かれていません。当然われわれの目は彼女の背の方に向かう点からみてそのことが理解できる。私はこの作品は「糸紡ぎの女たち」*Las hilanderas*とともにベラスケスが女性美を一番よく表現していると考えている。なお、「糸紡ぎの女たち」の方も「アラクネの寓話」*Fábula de Aracne*という神話画の体裁をとっている。

ベラスケスの最大傑作といわれる「ラス・メニナス」中の画家の自画像の胸に見られるサンティアゴ騎士団の会員である印とされる赤い十字架形は作者の死後、別人によって描き加えられたと伝えられる。それはベラスケスが貴族のみが加入を許されるこの騎士団の一員になったことを示すものである。拙稿「ベラスケス(1)」で私は画家の誕生に触れ、彼の父は Juan Rodríguez de Silva というポルトガル人、母は Gerónima Velázquez y Buenrostro で、ベラスケスの正式名は Diego de Silva Velázquez となるということを述べた<sup>(6)</sup>。しかし、もっと正確に書けば Diego Rodríguez de Silva y Velázquez となろう。それはともかく、ベラスケスは父方の姓 Rodríguez de Silva あるいは de Silva を名乗らず、なぜ母方の姓 Velázquez を名乗ったのか。その点と関連するのが、上記の「ラス・メニナス」における赤い十字架章である。ベラスケスにとって、首席宮廷画家として常に王宮内にあって、貴族たちの間で活動していき、オルテガ・イ・ガセットが言うように職業画家として絵を描くのではなく、絵は趣味あるいは王の命令だから描くのであれば<sup>(7)</sup>、ポルトガル人であるのではなく、イスパ

ニア人でなければならぬ。しかもイスパニア貴族の出身でなければならなかつた。したがつて、彼自身も意識的にイスパニア貴族の出であつた母方の姓であるベラスケスを名乗つたようである。そう理解すれば、ベラスケスという名称の使われ方が理解される。1980年毎日新聞社が主催してわが国で開かれた「スペイン絵画・ベラスケスとその時代」展ではベラスケスの名称はすべてディエゴ・ベラスケス・デ・シルバとなつたし、その時のカタログでもすべてそう記されているが、イスパニアでは非常に奇妙な呼び方である。イスパニアではやはりディエゴ・デ・シルバ・ベラスケスの順序でなければならない。そうでなければ父方の姓と母方の姓は混乱してしまう。両方の姓を名乗る習慣の土地では混乱を避けるために両者の順序は正確に守るはずである。

ベラスケスはイスパニアの貴族として生きようとして生きることのできた人だと思われる。彼の特色とされる作品数の少なさ、宗教画の多い時代に宗教画をそれほど描かなかつた点、神話画が逆にいくつある点、それらはすべて彼が貴族として生き、王の気に入りの画家としてだけ筆をとり得たところに起因すると思われる。宗教画が中心の時代はイスパニアでは19世紀までつづく。ゴヤの時代でさえ、ゴヤも宮廷画家であったのにかなりの宗教画を残している点からみても、ベラスケスは非常に特異な存在であったといえよう。ここで言う宗教画とはキリスト教をテーマとした作品のことであり、神話画とはギリシャ・ローマの神話に題材を求めた作品のことである。

## 4

本文では、ベラスケスがどんな時代に生きたのかを見ようとした。そしていくつか問題点をとり上げ、私なりの意見を述べた。きわめて乱暴な結論を出しているかも知れない。もっときめ細かく論証を挙げねばならないだろうが、次の機会にゆずることにする。

## 〔註〕

- (1) 堀辰雄全集第5巻（新潮社、昭33）p.123.「斑雪」
- (2) 大阪外国語大学 Estudios Hispánicos, Vol.7, 1980

- (3) José Ortega y Gasset: *Obras Completas*, Tomo 8, *Revista de Occidente*, 1983  
pp.479-480
- (4) 「スペイン絵画・ベラスケスとその時代」展(カタログ), 毎日新聞社, 1980, 神吉敬三: 17世紀スペイン絵画の特異性
- (5) プラド美術館のルーベンスの作品群参照。
- (6) 前掲 *Estudios Hispánicos*, Vol.7, p.117
- (7) Ortega y Gasset: *Obras Completas*, Tomo 8 中の「ベラスケス論」参照。

[参考文献]

José Gudiol: *Velázquez*, Ediciones Poligrafa, Barcelona, 1973

Julián Gállego: *Diego Velázquez*, Anthropos, Editorial del Hombre, Barcelona, 1983  
Bernardino de Pantorba: *La vida y la obra de Velázquez*, Compañía Bibliográfica Espanola, Madrid, 1955

Enriqueta Harris: *Velázquez*, Phaidon, Oxford, 1982